

2020年5月29日

日本初のアメリカでのホームステイ体験——「隣人愛」を考える（5）：

新島先生の受けた隣人愛（2）

副校長 竹山 幸男

5月も終わりに近づきました。先週から今週にかけて、京都ではやわらかな雨が降って少し涼しく感じられる朝やさわやかな朝があるかと思えば、日中は暑さを感じる日も続いています。1日1日と確実に季節が夏に向かって進んでいることを感じます。木々の緑だけでなく、比叡山などの山にかかっている空の雲の様子も毎日違う表情をしているので、今日はどんな表情が見られるのかな、と毎日楽しみに空を見上げています。もくもくとした丸い雲の日があるかと思えば、雨上がりの朝などはとても澄き通った青空に少しだけ線がひかれたような雲の日もあります。梅雨が少しずつ近づいているので、少し重たい雲が山にかかっている日もあります。皆さんのお住まいの地域で見える日々の風景は、季節の変わり目の今、どんな表情を見せているのでしょうか。

「学習ポータルサイト」を用いた学びも4月から始めてちょうど1か月半となりました。

3月からこれまでの3か月間の日本の状況と対応、海外の状況と対応、そして、医療関係の専門家の方々の提言など、さまざまな状況を総合的に考慮すると、感染症の今後の状況については、まだまだ予測が難しい状況が続くものと思われまます。学校としては、生徒の皆さんのいのちと健康を守ることを最優先に考えながら、「学習ポータルサイト」を用いた新たな学びを基本に据えて、各教科の学びの内容、生徒の皆さんとのやり取りの内容もさらに充実させていきたいと考えています。最初の1か月間は、まず担任の先生と生徒の皆さんとのつながりを大切にすることと、新たな学びの形態に慣れていただくことを主眼にして、少しずつ取り組みの内容をステップアップしてきました。教科の学びの面でも、通常学校で行なわれている授業とは違うスタイルで、生徒の皆さん自身の学びをふまえて課題を提出していただき、それにレスポンスする双方向の学びを行うところから、zoomで教科担当の先生方との面談などを行いながら、さらに双方向のやり取りを深めていくというかたちを模索してきました。今週から始めた1年生との自由研究の面談の折に、この1か月間の課題で自分の学びとして新たな発見のあったものを聞く機会もありましたが、オンラインでの各教科の課題の取り組みの中で、生徒の皆さんが学びを深めておられる様子も知ることができ、とても嬉しく思いました。先週も書かせていただいた通り、オンライン授業を取り込んだ教育の先進国である海外の進んだ学校の事例なども学びながら、学びの伴走者としての教員像などこれまでの「授業観」からの転換を探究していくような時代であることを認識しながら、さまざまな学びの方法を用いて学校としても取り組みを模索し、さらに進めていきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。現段階では、感染状況が落ち着いて

いるということで、いよいよ、来週6月第1週には、まず学年を分散させた登校日を設定し、生徒の皆さんとのつながり（心のケア）と学習支援ができるような場をつくっていかうとしています。中学生という発達段階での健康面への配慮や、京阪神はじめ近畿圏、ならびに愛知、岐阜などからも新幹線通学で通っておられる生徒の皆さんも多くおられますので、感染状況の推移（緊急事態宣言解除による緩み、第2波への警戒など）にもよりますが、6月の第3週目あたりまでは、学年を分散させた登校日を継続していくことを考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

新入生の皆さんにとっては、まだ1か月半が経過したところですので、皆さんの中で、教科の内容、学校のことなどでわからないことやご質問がある場合には、教科・担任の先生へ、また、機器の操作のことでわからないことがある場合は、ICT機器利用のヘルプデスクまでご遠慮なくご連絡ください。学校の教育相談も随時受け付けていますので、校務センターまでご連絡くだされば、担当者から連絡させていただきますのでよろしくお願いいたします。

第8週目（6月1日～）は、5月までの取り組みに引き続き、動画を用いた課題の提示、提出、メールでの質問、教科によってはZOOMで皆さんからの質問を受け付ける時間を設けますので、生徒の皆さんも参加してみてください。今週は、学年を2つのグループに分けて、学年を分散した登校日を設定しますので、別途学校からの連絡を見させていただきますようよろしくお願いいたします。5月中旬から続いてきた、各学年の国語、数学、英語、社会、理科の先生方と生徒の皆さんとの面談（クラスまたはグループなどで）については、登校日の設定に伴い一部変更を加えていますので、本日ご案内の面談予定表でご確認ください。

夏休みの自由研究についても、取り組みが進められています。1年生の皆さんに対しては、今週から自由研究のzoomでのグループ面談を始めております。来週の登校日の週に、自由研究のテーマ登録をしてもらう予定になっています。その後、6月の第2週～第3週にかけて、自由研究のテーマを深める面談をする予定になっています。明日30日（土）以降に、1年生自由研究のロイノートを見ていただいて、自由研究のテーマを深めるための問いなどについて考えておきましょう。2・3年生については、現在自由研究の登録期間になっていますので、今年の夏休みの研究に向けて具体的に考え始めてみましょう。

日ごろの担任の先生からの連絡、面談については、その都度レスポンス（応答）していただき、皆さんの日頃の様子などを知らせてください。健康観察については、引き続き保健室あてにご提出ください。特に、来週は登校日がありますので、健康観察をしっかりといただき連絡をよろしくお願いいたします。第8週目の詳細については、別途ホームページ上の教務部より「第8週目のお知らせ」または学習ポータルサイト上の生徒ページ・生徒伝達に「第7週目のお知らせ」をご覧ください。機器（iPad）やアプリの使い方不明な点があれば、「学習ポータルサイト」（→ [生徒ページ] → [在宅学習サポート]）にアドバイスや解決方法を掲載しています。また、「2020年度版ICT活用・情報倫理ハンドブック」（同志社中学校）の1～28ページに、課題

提出で用いているロイロノート、zoomの利用方法を含め、iPadでの学習に際してのさまざまな活用ガイドが掲載されていますので、取り組みの際には、引き続き参照するようにしてください。

先週は、新島先生とハーディー夫妻との運命的な出会いについて、善きサマリア人のお話を思い起こしながら、考えてみました。そして、考えられないほどの愛情をもって「隣人愛」を実践したハーディー夫妻、その「隣人愛」を注がれた新島先生がおられたからこそ新島先生のその後の歩みと同志社の創立があることを学びました。ハーディー夫妻に見られる「隣人愛」に示された愛とその行動は、神様の愛を受けたクリスチャンとしての犠牲を伴う無償の愛、無条件の愛に基づく行動であったことも教えられます。先週のお話のところでは書きそびれたのですが、新島先生とハーディー夫妻をつないだ英文の手記は、ボストン港の近くにあったセイラーズ・ホーム（船員会館）で書かれたものでした。新島先生は、全身全霊をこめて、2日間寝ずに「なぜ脱国してきたのか」を書いたのですが、そのレンガ建ての船員会館の建物（99 Purchase Street）は今も残っていて、同志社中学校のボストン・ハーバード・アーモスト研修でも生徒たちと訪ねるコースに入っています。ボストン港があったところは、今は埋め立てられているものの、ボストンの街の中心地ボストン・コモンやクインシーマーケットからも15分くらい歩いたところがあり、この場所を訪ねるといつもこの新島先生の手記と出会い、同志社の原点の場所であることを思い起こさせられます。ボストン・コモンのそばにある州議会議事堂。そして、そのそばにあるビーコンヒルに、新島先生の恩人、ハーディー夫妻のレンガ建ての住まいもあり、今もそれが残っています。（議事堂そばのJoy Street沿いの#4の建物）皆さんもボストンを訪ねる機会があれば、ぜひ訪問してみてください。



ボストンに現存するセイラーズ・ホーム（船員会館）前で記念撮影する同中生たち（2014）

さて、今日は話の舞台を新島先生の学んだ、1780年創立のキリスト教主義の高校：フィリップス・アカデミー（ボストン市内から北のまち・アンドーバーにあります）に移したいと思います。フィリップス・アカデミーは、当時も今もアメリカの名門高校の中でも特に有名で、卒業生にはアメリカの政治経済その他さまざまな分野で活躍している方々がおられる学校です。ハーディー夫妻からの返事があった時、新島先生の目は嬉しさのあまり涙があふれ感謝の思いにいっぱいになった、と語っておられます。ハーディー夫妻は、アジアの日本から脱国、密航してきた青年のために、当時としては最高の教育を施すために、学校側と話しをしてホームステイ先を探



フィリップス・アカデミー (アンドーバー)

し、教育費、生活費もすべてを与えていくという当時としては考えられない対応をしたことは、前回学んだ通りです。全寮制の学校なので、寮滞在が原則なのですが、新島先生の特別な状況を考慮してホームステイ先を探し出しました。そのホームステイ先がヒドゥン家でした。ヒドゥンさんは、病弱の弟と叔母がいて下宿の学生を置いたこともなかったし、見ず知らずの東洋人であった新島先生を下宿させるのに躊躇しました。しかし、ハーディー夫妻と同じように、英文の「脱国の理由書」を読んで感動し、心を動かされ、下宿を引き受けることにしました。

彼女もまた、敬虔は信仰深いクリスチャンで、教会では日曜学校の先生もしていたので、新島先生の手記が非常に心に響いたのだと思います。新島先生は、ヒドン家でのホームステイ生活のことを「まるで自分の家にいるかのように快適です」とハーディー夫人に報告しているし、ヒドゥンもまた新島先生のことを下宿学生ではなく、「家族の一員である」と話していたと言われています。ちょうど、現代の私たちがホームステイ体験をするのと同じように、新島先生もヒドゥンさんの家でいろいろな心配や不安、戸惑い、生活習慣の違いや言葉が十分通じない中で過ごしていくこととなります。ヒドゥンさんが、愛情をもって、家族の一員であるかのように新島先生のホームステイ生活のお世話をとても一生懸命してくれたからこそ、新島先生が一生懸命勉強に励むことができたと言えるでしょう。そしてこの、新島先生の日本初のホームステイ体験の中にも、イエス・キリストの愛に根ざした「隣人愛」があったことに気づかされます。

彼女もまた、敬虔は信仰深いクリスチャンで、教会では日曜学校の先生もしていたので、新島先生の手記が非常に心に響いたのだと思います。新島先生は、ヒドン家でのホームステイ生活のことを「まるで自分の家にいるかのように快適です」とハーディー夫人に報告しているし、ヒドゥンもまた新島先生のことを下宿学生ではなく、「家族の一員である」と話していたと言われています。ちょうど、現代の私たちがホームステイ体験をするのと同じように、新島先生もヒドゥンさんの家でいろいろな心配や不安、戸惑い、生活習慣の違いや言葉が十分通じない中で過ごしていくこととなります。ヒドゥンさんが、愛情をもって、家族の一員であるかのように新島先生のホームステイ生活のお世話をとても一生懸命してくれたからこそ、新島先生が一生懸命勉強に励むことができたと言えるでしょう。そしてこの、新島先生の日本初のホームステイ体験の中にも、イエス・キリストの愛に根ざした「隣人愛」があったことに気づかされます。



Mary E. ヒドゥンと
新島先生が下宿していたヒドゥン家

新島先生のホームステイ体験とフィリップス・アカデミーでの高校生活、今でいえば留学体験とでもいえるのでしょうか。それらはとても有益なものでした。ヒドゥンさんによる愛情をかけられたホームステイ体験だけでなく、新島先生は、同じ時期にヒドゥンさんが住んでいた家の半分



フィリップス・アカデミー時代の新島先生

を借りていたフリント先生夫妻からも、とても手厚いサポートを受けることとなります。フリント先生は、もともと高校の校長をしていた方ですが、神様からの召命を受けて牧師になるために校長を辞めて、当時フィリップス・アカデミーに隣接していたアンドーバー神学校で学んでいました。新島先生は、フリント先生夫妻を家庭教師にして、学校の授業の予習、復習とともに、聖書を学ぶこととなります。今から考えてみても、高校の校長先生経験の家庭教師付きでこんな手厚いサポートを受けながらの留学生生活を



Ebraim フリント牧師

送れるのは何と恵まれたことだったのでしょうか。ヒドゥンによれば、「実際のところ、彼（新島先生）がフリント（先生）から得ているものは、高校の先生から受けているものよりもはるかに大きい」と言われているくらい、新島先生のアメリカでの学びやクリスチャンとしての信仰生活の土台に影響を与え、新島先生に対して愛をもってサポートをされていた様子が伺えます。



フィリップス・アカデミー時代の、新島先生の勉強ノートなど

新島先生は、フリント夫人から本格的に聖書のことを学ぶことになります。留学生活が2か月たったころの手紙には、次のように書かれています。『フリント夫人は、毎夕私に新約聖書を教えてください。私は、「幸いなるかな」主の祈り、黄金律、マタイ伝22章37節、ヨハネ伝3章16節、詩編第1編と第23篇、十戒を暗記しましたし、新約聖書はルカ伝17章まで読みました。旧約聖書では、スラエル人がエジプトから脱出したこと、荒野にとどまっていたとき、神の不思議な御業によって衣食を与えられたこと・・・などを読みました。そしてこれらのことならについて毎日夕方に先生の部屋に行っておさらいをしています。』黄金律、マタイ伝22章37節は、まさに今年の学校の年間聖句であり、「神様の愛」とキリストの愛を受けた「隣人愛」が示されている箇所となります。また、函館からの脱国を助けた福士卯之吉宛の手紙にも、『その人の奥さん（フリント夫人）は、新約聖書という、この世で最も神聖で価値のある書物を僕に教えてください。聖書には、一人の救い主イエス・キリストという方が、暗闇を照らして罪びとを救うために父なる神から遣わされたとされています。』そして、この手紙の後半には、先ほどの手紙にも書かれていたヨハネによる福音書3章16節が引用されており、イエス・キリストによる救い、福音を、脱国の恩人である福士さんに何とかして伝えたいという思いが書かれています。

「神は実にその一人子を賜ったほどに世を愛された。それは、御子を信じる者が一人も滅びないで、永遠のいのちを持つためである。」（ヨハネによる福音書3章16節）

新島先生は、毎週日曜日になるとオールドサウス教会に通い、日曜学校にも出席していました。日曜学校の先生は、ミス・マッキーン。毎日夕方の聖書の学びと日曜学校での聖書の学び。新島先生の生涯変わることをのなかった純粋で熱烈な信仰が、困難を乗り越えて創られた同志社創立の原動力になっていることはよく知られていることです。英語のライフには、「いのち」と「くらし」の二つの意味があると言われています。主イエス・キリストによるいのちの言葉によって救われ、信仰を持った彼女たちの「いのち」と「くらし」のズレはなく、ひとつだったのでしょ。新島先生のキリスト教信仰は理屈ではなく、新島先生の人生を導いた実体験がベースと

なっていました。そして「隣人愛」を実践されていた魅力的なクリスチャンの生活の姿を通じて、キリスト教の信仰に立つ決心をすることになります。新島先生は、ホームステイ生活と留学経験を始めて1年もたたない1866年12月30日に、イエス・キリストを救い主として信じ、洗礼を受けたのです。



新島先生が毎週日曜日に通っていた
オールドサウス教会（アンドーバー）

新島先生は、先ほど紹介したヨハネ3章16節の聖句を、「福音の要」と言っています。また、いろいろな手紙や説教においても、この聖句が紹介されており、新島先生の愛唱聖句、新島先生の信仰の原点ともなっている聖句とも言えます。（これらの内容については、また別の機会に紹介できればと思います。）一方、現在のキリスト教会においても、この聖句は「聖書の中の聖書」つまり、キリスト教のエッセンスが記されていると語られています。神様の愛は、イエス・キリストのいのちを犠牲にして私たちに賜ったほどの大きな愛で示され、その愛を受け入れて新たにイエス・キリストのいのちを受けて歩み始める一人ひとりこそが、隣人愛を実践することができるのではないか、という問いかけもこの聖句を通じてなされています。まさに、新島先生は、実際のホームステイ生活と留學生活の中で、隣人愛を体験として受け、体験や経験の中での聖書の学びが新島先生の生涯にわたる「隣人愛」のスピリットを育んだ原体験としてあったのです。

5月を締めくくるこの1週間も、キリスト教学校に学ぶ私たち一人ひとりが、これまで私たちを導いてくださった神様の愛への感謝とともに、主イエス・キリストの愛に心を満たされて、実際の生活の中で、身近な周りの人たちから受けた「隣人愛」を思い起こし、愛を受けた私たちが、周りの身近な人たちへ「隣人愛」を実践することができるように、神様に祈りつつ歩ませていただきます。

ボストンでの友人 J.M. シアーズから贈られた聖書を新島先生は愛用していました。（同志社社史資料室蔵）
そこにも、ヨハネによる福音書3章16節のところに書き込みがあり、大切にされていたことが伺えます。

For God so loved the world
that he gave his one and only Son,
that whoever believes in him
shall not perish
but have eternal life.
John 3:16

